

# 見学のしおり



ひとめんとって  
柔らかな表情の人面把手  
(縄文中期：池田遺跡出土)

## ～歴史のロマンをたずねて～

歴史民俗資料館は、失われつつある歴史、民俗、考古に関する資料の収集や保存を行うとともに、皆さんに親しまれ、楽しく利用していただくための施設として昭和56年(1981年)11月1日に開館しました。

また「博物館類似施設」としては埼玉県内で2番目に古い歴史を持つ施設です。



〒352-0025  
埼玉県新座市片山1-21-25  
電話：048-481-0177  
FAX：048-481-0149  
Email：rekimin@city.niza.lg.jp

## ～新座ゆかりの人物～

### 《古代》

・沙良真熊 (生没年不詳)  
奈良-平安時代前期の新羅琴の演奏家。武蔵新羅郡の人。新羅からの渡来人かその子孫とされる。宝亀11年(780)広岡造の氏姓をさすけられる。弘仁年間(810~823)に興世書主、高枝主に新羅琴を教えたという。名は「まくま」とも読む。

### 《中世》

・他阿真教  
(嘉禎3年(1237)~文保3年(1319))  
鎌倉時代後期の時宗の僧。遊行上人2世。片山の法台寺の開祖である。正しくは他阿弥陀仏と称し、略して他阿と呼ばれる。  
建治3年(1277)九州で時宗の開祖である一遍に師事して以来、諸国の念仏遊行に従う。一遍の没後、時衆を再編成して引き連れ、北陸・関東を中心として遊行を続けた。  
他阿真教が片山の地に滞在したのは、徳治元年(1306)頃とされている。

### ・片山氏

片山氏は、上野国多胡郡片山、武蔵国新座郡片山郷を名字の地とする2つの流れが存在する。  
承久4年(1222)、片山右馬允広忠は承久の乱における勲功として丹波国和知荘の地頭に補任された。丹波に移住したのちも武蔵国出身の関東御家人として、新座郡片山郷に本領を持ち続けていたとされるが、片山の地に残った本家についての消息は明らかではない。  
『太平記』巻九に「六波羅探題北条越後守仲時以下自害の事、片山十郎入道は同時に自害す」の記載がある。

### ・道興(道興准后)

(永享2年(1430)~大永7年(1527))  
室町時代の僧侶で聖護院門跡。関白近衛房嗣の子。准后※となった後は「道興准后」と称されるようになった。  
文明18年(1486)から翌年にかけて聖護院の再建と本山派修験の組織化を目的に東国を廻国。紀行文『廻国雑記』の著者として知られる。  
『廻国雑記』には「野寺の鐘」や「野火止の塚」が紹介されており、中世の新座を知る上で貴重な史料である。  
※ 准后：太皇太后・皇太后・皇后の三后に準ずる待遇を与えられた人

## ～新座ゆかりの人物 その2～

### 《近世》

・松平信綱(松平伊豆守)  
(慶長元年(1596)~寛文2年(1662))  
江戸前期の幕府老中。大河内久綱の長男。慶長6年(1601)、松平正綱の養子となる。徳川家光の小姓として近侍。寛永10年(1633)武蔵国忍城主となる。同14年島原の乱鎮圧を命じられ、現地で原城攻略を指揮。老中として幕政の最高責任者となる。同16年(1639)1月武蔵国川越藩(埼玉県川越市)に転封。承応4年(1655)に家臣の安松金右衛門と小島助左衛門に補佐を命じ、野火止用水を開削。  
慶安4年(1651)に家光の没後、幼い将軍家綱を補佐し、由井正雪の乱を処理するなど、幕政を主導した。才気煥発で「知恵伊豆」とも称される。累代の菩提寺である岩槻の平林寺を新座の地に移したのは、子の輝綱である。

### ・安松金右衛門(吉実)

(慶長6年(1601)~貞享3年(1686))  
信綱の家臣の一人で、播磨の出身。玉川上水・野火止用水の開削で知られる。「算術の達人」と伝えられる。墓は、昭和10年(1935)に新宿太宗寺から松平信綱の菩提寺平林寺に移された。

### ・小島助左衛門(正盛)

信綱の家臣団の一人で、丹波の出身。安松金右衛門と共に野火止用水開削に従事。平林寺に安松金右衛門と並んで墓がある。

### ・片山七騎

黒目川流域の片山村は、天正18年(1590)徳川家の所領となり、元禄年間(1688~1703)には10か村に分かれる。この地域は、後に片山七騎と呼ばれる。米津・桜井・神谷・荒川・木村・柘植・小野・田中・羽田などの旗本が入れ替り知行していた。

### 《近代》

・松永安左衛門(耳庵)  
(明治8年(1875)~昭和46年(1971))  
「電力王」「電力の鬼」と言われた日本の財界人。近代三茶人の一人としても知られ、耳庵の号を持つ。氏名は「松永安左衛門」と表記されることもある。  
昭和13年(1938)平林寺の傍に土地を得て、飛騨地方の田舎家を移築し、茶の湯を楽しんだ。  
氏の没後、土地と家屋は菩提寺の平林寺に譲られた後、平成14年5月に平林寺から新座市に無償貸与された。これが現在の「睡足軒の森」である。

## ご利用案内

- ◆開館時間
  - ・午前9時から午後5時まで  
(入館は午後4時30分まで)
- ◆休館日
  - ・月曜日  
(ただし、この日が国民の祝日の場合は、その直後の国民の祝日でない日も休館)
  - ・祝日(文化の日を除く)
  - ・年末年始(12月29日から1月3日まで)

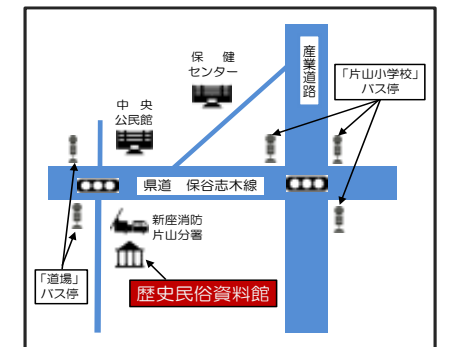
- ◆入館料 無料
- ◆駐車場
  - ・駐車可能台数5台(普通車)
 ※団体でのご利用、バスをご利用の場合は、事前にご相談ください。

- ◆交通案内
  - 西武池袋線
  - ・ひばりヶ丘駅北口からの全部の西武バス乗車、「道場」下車 徒歩3分

- ・大泉学園駅北口から 西武バス・片山小学校行き又は新座営業所行き乗車、「片山小学校」下車 徒歩5分

- 東武東上線
- ・志木駅南口から 西武バス・ひばりヶ丘駅北口行き乗車、「道場」下車徒歩3分

- ・朝霞台駅南口から 西武バス・ひばりヶ丘駅北口行き乗車、「道場」下車徒歩3分



## 《1.太古の新座》

～旧石器・縄文・弥生時代～

新座市は、柳瀬川・黒目川沿いに開けた沖積低地と、それにはさまれた野火止台地からなり、古くから居住の場のみならず、宿場や交通の要衝として栄え、時代の流れとともに大きな発展をしてきました。

今から約2万7千年前の旧石器時代には、すでに黒目川流域の市場坂遺跡等に先人たちが生活していたことがわかっています。

この時代、人々は石器を主な道具として、シカやイノシシなどの獲物を追い、また植物を採集して暮らしていました。

市域には、両河川流域を中心に旧石器時代から古墳時代に至るまで100か所余りの遺跡があります。稲作農耕に代表される弥生時代には、河川流域の谷津が水田として拓かれ、新開遺跡では集落と複数の方形周溝墓が発掘されました。



約8万年前、新座の大半は海の底でした



狩猟の様子（再現図）



市内の遺跡から出土した土器・石器類

## 《2.「新座」の誕生》

～古墳・奈良・平安・鎌倉・室町時代～

古墳時代から奈良・平安へと時代が進むにつれ、河川流域全体に居住空間が広がり、やがて「ムラ」へと拡大していきます。

そのころ、天平宝字2年（758）新座の周辺（現在の新座市・志木市・朝霞市・和光市周辺）は、律令政治のもと、先進文化をもつ新羅人の政治的移住が行われ、武蔵国に新羅郡が設置されました。市域はその郡下に属しましたが、生産技術や生活文化の面で大きな影響を受けたものと考えられます。

新羅郡はその後新座（倉）郡（爾比久良）、さらに新座郡と名称を変えますが、新座市の名はその歴史的名称に由来するものです。

やがて、武蔵武士の台頭から片山郷の出身である片山氏が興り、鎌倉時代に黒目川流域を中心に活躍したといわれています。

一方、普光明寺や氷川神社を中心とする柳瀬川流域の大和田郷一帯にも文化の華がひろぎ始めました。

ところが、承久4年（1222）、片山右馬允広忠が承久の乱における勲功賞として丹波国（現在の兵庫県）和知荘の地頭に補任され一族の大半が赴任したのと相前後して、新座郡の名前は歴史の舞台から姿を消し、しばらくの間「空白の時代」を迎えます。



勝宝8年（756）の古写経（複製）



中世の信仰を物語る板碑

## 《3.「知恵伊豆」と「野火止用水」》

～江戸時代～

戦国の乱世が終わり、近世に入ると、新座は江戸近郊地という位置から要所とされ、川越・高崎藩領をはじめ、片山七騎などが知行した旗本領や、平林寺領が入り組んだ支配体制下におかれました。

なかでも川越藩主松平伊豆守信綱による野火止台地の開発や、それに伴う野火止用水の開削は有名です。

野火止用水は野火止の原野に恵みをもたらし、次第に人口も増えてくると、新座は再び歴史の表舞台に姿を現します。

新畑開発による開拓などにより、生産高が向上すると、大消費地である江戸へ穀類や野菜類などの供給が行われました。

また黒目川や柳瀬川の流域では、水田耕作も営まれていました。

江戸時代には開発によってできた村などを始め、市域には15の町や村※が成立しました。これらの村々は幕末の変動を経て明治時代を迎えます。

※ 黒目川流域の片山郷は、石神・堀之内・栗原・十二天・中沢・上山片・野寺・辻・原ヶ谷戸・下片山の10村。柳瀬川流域の大和田郷は、大和田町。野火止台地上の新田開発地は、野火止・菅沢・北野・西堀の4村を指す。



野火止用水と新田の案内板（電光）



野火止新田開発関係の古文書

## 《4.そして現在へ・・・》

～近代・現代～

明治8年（1875）4月、黒目川流域の片山10か村は、合併して片山村となり、明治22年（1889）4月には町村制施行によって、大和田町と野火止村ほか新田3か村が、合併して大和田町になりました。

その後、昭和30年（1955）3月には大和田町と片山村が合併して新座町が成立し、さらに昭和45年（1970）11月には市制を施行しました。

現在、人口16万人を擁する新座市は、埼玉県南西部の中堅都市として、順調に発展を続けており、「雑木林とせせらぎのあるまち」を目標としてまちづくりを進めています。

反面、高度経済成長期から現在まで続く急激な都市化によって環境や生活形態はすっかり様変わりしましたが、古くからの芸能（里神楽・獅子舞・はだか神輿・大和田囃子）が継承されています。

また、日本初の南極探検家として有名な白瀬蘆中尉が昭和17年から19年までの間、新座市内（当時の片山村）に居住していた頃に交流のあった市内の方から寄託された白瀬中尉との手紙や南極探検の模様を収めた写真帳等の貴重な資料と、市内在住の設計関係者から寄贈された、現役の砕氷艦「新しらせ」の船体外板素材「ステンレスクラッド鋼板」等の珍しい資料も併せて展示しています。



昭和の暮らしコーナー



日本人初の南極探検家 白瀬蘆中尉コーナー